■しまゆむた

沖永良部島研究雑感

先田　光演（和泊町歴史民俗資料館）

1　はじめに

沖永良部島の歴史と民俗の研究を志してから約40年が経過したが，この島に大きな研究対象があって，その未解決の事象に挑戦してきたという手応えを未だもって感じることができない。それは研究成果があがらなかったからなのであろうが，常々満たされない思いとしてまとわりついてきた。

沖永良部島は研究対象としては不可解な島である。出身地として「選でぃ選ばらぬエラブぬ島」と公言する人も多いが，研究者にとっては他の島々と比較した時に，十分に満足できる歴史と民俗の現地資料が非常に少ないのである。なぜ不可解な島と感じているのか，そのいくつかを列記しておこう。

①　古来からの年中行事が途絶えた島。

本島は1609年までは琉球王国の版図であり，王府の任命したノロ神女組織のもとで人々の生活が営まれていた。人間の生死から世の中の吉凶すべてが，神々の存在を信じた中にあった時代の祭司行事が伝承されることなく，途絶えてしまった。なぜであろうか。その解答は今だに研究されていない。不思議な現象である。

②　古文書がほとんど残されていない島。

奄美諸島の他の島には近世以前の琉球王国時代の辞令書の他にノロ遺品などが保存されて残っているが，本島には辞令書も現存しないばかりか，ノロ遺品さえも数少なくなっている。近世の薩摩藩政時代に入ると，支配政策の徹底は膨大な文書で下知され，現地からは詳細な報告書が上申されたと考えられるが，それらしい古文書は皆無である。特に土地制度に関する名寄帳や取納帳，宗門改帳などは代官所や島役人が保管していたはずであるが，すべて失われている。島役人として出世するためには書役になって記録に精通しなければならなかった時代である。そのためには「読み書き算盤」ができることが必須条件であり，遠島人などが手習いを教えた私塾が多かったのもそのためであった。書役達が書き記した古文書はいったいどうなったのであろうか。

ただ唯一『沖永良部島代官系図』だけは残っている。この代官系図も，与論島では『代官記事録』と題して残されていて，代官系図には記されていない貴重な記事が見られるのである。(注１)

明治維新以降の記録もほとんどない。幸いに「沖永良部島諸事改正令達摘要録」が残されたが，これも明治10年から12年にかけての令達を，沖永良部島支庁長西久保紀林が一冊にして編集しなおして保管してあったおかげであった。西郷隆盛が流罪人としてあったときの記録文書は，今はない。南洲神社を建立して西郷を崇めてはいるが，彼が残した遺品は現地にはないのである。さらに，島には旧家が多いが，なぜか系図や家譜がない。すべての記録がなんらかの原因で焼却か廃棄されてしまった。不可解な島である。

③　支配構造のなかの祭と芸能

本島の各シマジマにはかつての祭場であったシニグドーといわれる地所が残されている。そこではシニグ祭が執り行われた。しかし，このシニグ祭が明治３年を最後に中止されたのである。その中止の理由に「今の士族」が威勢を張り，「侍連中の施行

せし祭」なので四民平等の今日にはそぐわないということがあげられている。(注２)このように五穀豊穣を祈るシニグ祭が，本島では島役人階級の勢力誇示の場として改作されていたのであった。いつだれが聖なる神々を権力構造に取り込んで祭さえも作り替えてしまったのか。不可解な島である。

さらに，神々に祈るための舞踊が消滅して，代官役人や島役人を慰労するための舞台芸能が作り上げられてきたのも不可解である。年貢のことを島では「グムチ」という。必ず上納ならぬ上演しなければならない踊りという意味で「グムチヲゥドウイ」といわれる舞踊の数々。村人の自らの生活を守護してもらう神への奉納踊りが廃止されて，支配構造の中で慰労のための年貢踊が強制されたであろう歴史は，解明されないまま闇のなかにある。

④　従順と進取の気風

本島の島民性としては純朴であり，勤勉であると指摘されることが多い。さらに，新しい農業を取り入れる進取の気風があるとも指摘される。しかし，内実は今でも島民の中には，方言で役場職員を「シュータ」というように，「上からの通達や指示には従順に従う」意識が残っている。そして，個性的なリーダー性を持った人物がほとんど見られないため，「シュータ」の上意下達には素直に従って，疑問や異議を申し立てることが非難される雰囲気が残ってきた。

「旧来の陋習を破り，天地の公道に基づくべし」という理念が，明治維新期の島の指導者たちによって喧伝され，それにともなってシニグ祭が廃止されたようである。そして，かわるべき理念として高千穂神社が建立されて国家神道が浸透し，さらに臣民としての従順さが育成されてきたのであろう。こうして培われた従順性と農業開発における進取の気風は相反するもののようであり，不思議な島民性である。

2　沖永良部島の研究史

上記のように研究素材としての本島の原資料は乏しいものの，それでも現在まで各種の研究報告書は数多く出されている。(注３)

それらは研究報告の傾向として大きく４区分できそうである。

第１期は大正年間の操坦勁の「沖永良部島沿革誌私稿」や島伊名重の「本島維新前後の教育史」などのような，原資料の収集を目的にした時期である。操家には相当な古文書があったことは想像できる。それらを活用して「私稿」は纏められたと考えられるが，原本が保存されなかったことはなぜであろうか。この時期の島出身の研究者としては操や島の他に，安藤佳翠や玉江末駒がいた。

第２期は戦前の岩倉市郎『沖永良部島昔話』や野間吉夫『シマの生活誌』から戦後の柏常秋『沖永良部島民俗誌』や永吉毅『えらぶの古習俗』や甲東哲『島のことば』に至る，採集報告書が出版された時期である。この時期は現在まで引き続いていて，フィールドとしての本島の民俗事象が多くの研究者によって採集報告されている。

この時期の昭和37年頃，筆者も鹿児島大学教育学部在中に市内に在住していた和泊町西原出身の柏のもとに，郷土研究の仕方を学ぶために数回出掛けて教えを請い，民俗研究の基礎が聞書採集にあることを学んだ。当時，鹿児島園芸高校教諭であった山下欣一も一緒に柏の研究会に参加していたので，山下の「徳之島における民間療法聞書」にならって，郷里から移住してきた古老を訪ねて沖永良部島の民間療法をまとめたことがあった。その後，この民間療法聞書と，山下の教示によって島のユタから採集した呪詞などを収録した『沖永良部島のユタ』を出版した。

このように第２期には，本島における民俗調査が盛んに行なわれてきたが，歴史に関する新たな調査報告は見られなかった。その中で第１期に記述された草稿が『沖永良部島郷

土史資料』として刊行され，さらに改訂版も発行された。しかし，基本的な古文書がまとまって発掘されたことはいない。

ただ，奄美の黒砂糖惣買上制が本島では天保の改革として，なぜ実施されなかったのかについて，甲と先田と清村杜夫が小論文を発表した。(注４)

第３期は1970年代以降である。今までの採集報告の積重ねの上に，他の地域の資料と比較した研究が行なわれて，本格的な論考が進展して今日に至っている。この時期でも歴史の研究は進んでいないのである。それは新に古文書が発見されることがなかったためである。

この第３期の初めには，『南日本文化』５号に発表された，山下欣一「沖永良部島における創世神話と動物供儀」と，下野敏見「沖永良部島の民俗行事」があった。二つの論文とも本島の民俗伝承の意義とその構造を明らかにした画期的なものであると考えている。その後，単なる採集報告書ではない貴重な研究論文が数多く発表されてきている。このような研究によって，本島で伝承されてきた民俗が他地域の事象と比較検討されながら，その意味合いが解明されてきたのである。

さらに，最近では本島のような「境界地域」においては，地域住民が多重性を持っていて，いろいろな民俗文化の流入を受けながら，その地域の融合力で新たな文化を創造していくという動態的な視点からとらえた研究が始まっている。すなわち文化人類学による本島の民俗事象へのアプローチである。これは高橋孝代の「沖永良部島民のアイデンティティと芸能」において，その先鞭が付けられた。このような文化人類学による調査研究は，本島の第４期の研究傾向として位置付けることができるものと考える。この研究は伝承文化・民俗そのものの比較研究とは視点を異にしたものであり，現在でも変容しながら新たな創造を試みる地域住民の行動様式を明らかにしてくれるもののようである。先にあげた不可解な本島の謎が文化人類学による研究によって解明できるかもしれない。

３　沖永良部島の構造図

本来の年中行事が途絶え，古文書もほとんど残されていない本島にも，丹念に調査を進めていけば多様な伝承が保存されているのに気付く。さらに，採集事項を比較しながら考察していくと，かつての民俗社会の姿を描きだすことができるのである。このようなフィールド研究は南山大学の知名町正名集落における長期にわたる調査と，蛸島直の緻密な調査研究にその例を見ることができる。

このような研究の深化に刺激されて，筆者は構造図の作成を考えてきた。昭和５５年の奄美地区民俗文化財緊急調査の一員として知名町の民俗地図を作成したときからシマジマの豪族伝説に関心を寄せてきた。そして，世之主伝説を収集していく過程で図１のような伝説の分布図と構造図を思いついたのである。本島は小さな島ではあるが，地域によってそれぞれのシマの個性が異なっている。西部の古層のアジ伝説は，統一支配以前の伝説を語り伝えることによって，自分たちのシマの自立性を育んできたようである。東部の西郷伝説は，偉人崇拝の風習と島役人層の意識に支えられて流布していった。

古い時代の多様な豪族伝説が残っている西部地区と，近世期の島役人が藩役人とのつながりを深めながら支配階層を形成していった和泊，手々知名を中心とした東部地区との間に，中世の世之主伝説が分布している。

世之主伝説は奄美大島の與湾大親伝説と共に，自害した悲劇の伝説として知られている。

世之主は琉球北山王と島のノロ(異伝あり)の間に生まれたと言われ，四人の家臣が仕えていた。その家臣が争ったという伝説もあり，世之主伝説は前の時代の豪族伝説も取り込んだ形で伝承されている。

図１　沖永良部島の伝説分布図と構造図

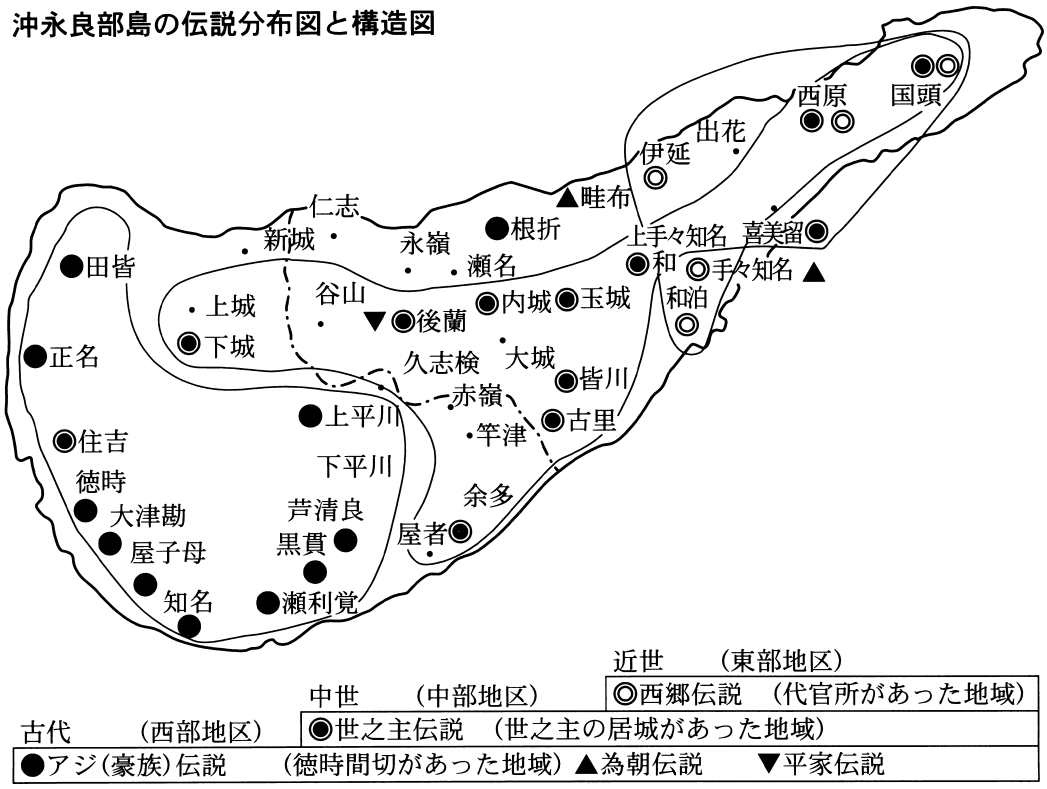
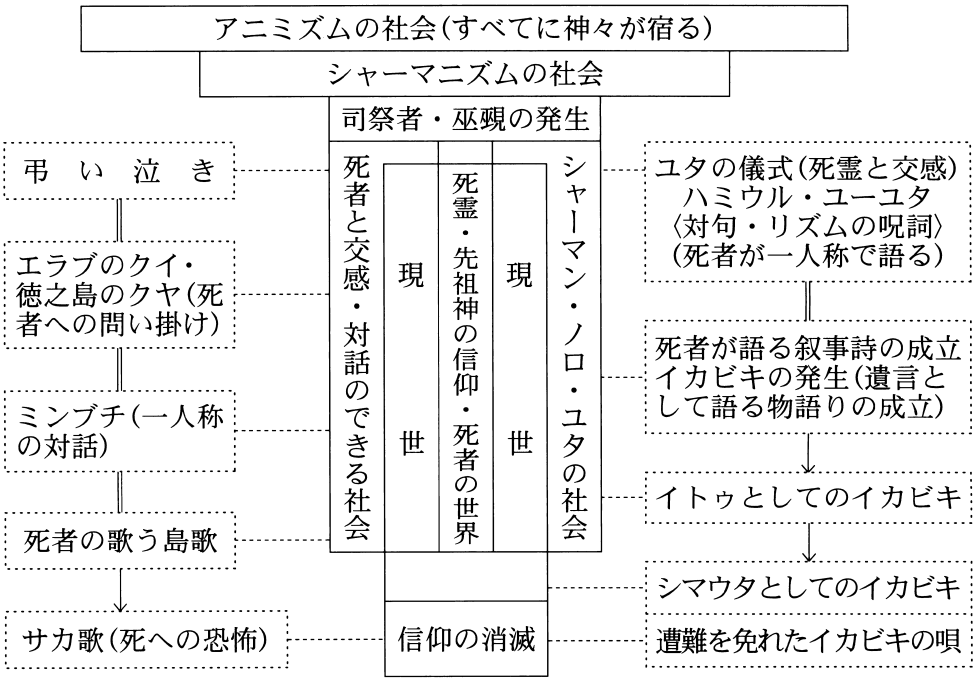


図２は，本島で歌い継がれてきたイカビキの島唄を取り巻く民俗的信仰社会を構造図化した系統図である。イカビキはイカビキ漁に出て遭難した人の霊が遭難の様子と，産まれ来る我が子にたいする遺言を歌った島唄である。

図２　イカビキの系統図



このような系統図によって，本島の民俗社会がユタというシャーマンによって形づくられてきたことを構造的に理解することができる。そして，シャーマニズムの根底には死者の世界と交感してきた先祖崇拝の信仰が横たわっていることも理解できるのである。

図３は，琉球から伝来してきた継母念仏が各島々でどのように受容されたかを図示したものである。これは各島々の伝承を比較することによって，本島の特質を浮き彫りにするための構造図である。これによると本島は芸能化する特色があり，それはグムチヲウドゥイの伝統と先祖崇拝の信仰社会によるものであることが推測できる。

図３　継母伝説の受容形態

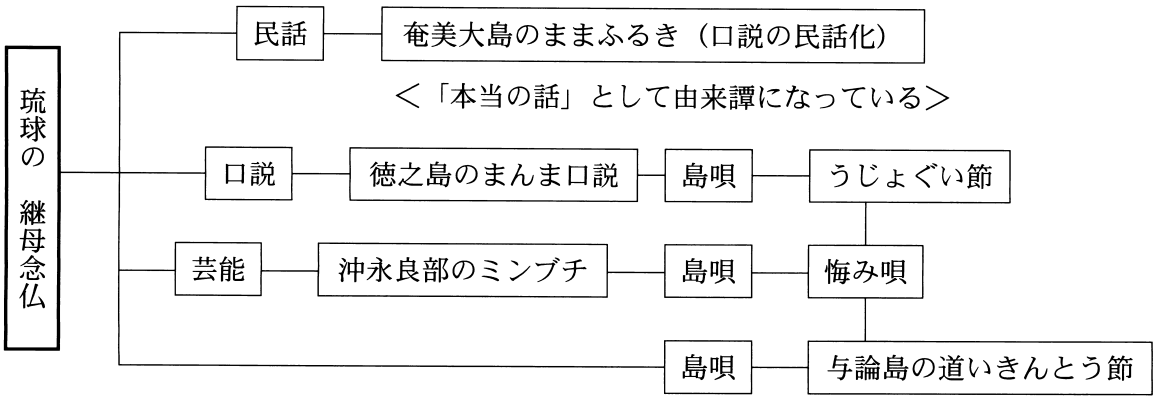


図４　社倉の影響

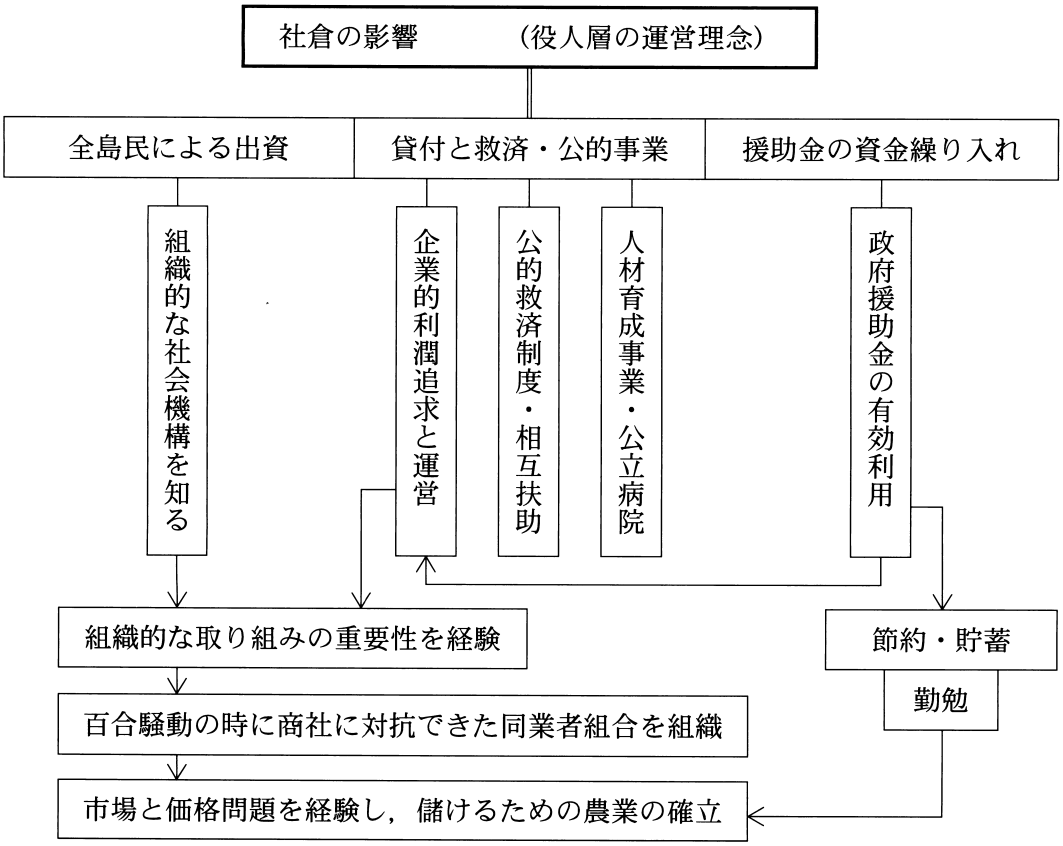


図４は，明治以降に本島で組織された社倉の運営と後世に及ぼした影響を図示したものである。

現在の農業の発展がどのような歴史性によるものであるのか，よく受ける質問であるが，エラブ農業の活力は，明治３年に創立された社倉（西郷隆盛の勧めた救済制度）に由来していることを，私案として構造図化してみたのが，この図表である。

本島の農業技術の高さと勤勉性は，藩政時代における砂糖専売制の歴史が浅く，水田耕作が残ってきたために集約的な農業形態が引き継がれて，近代農業発展の素地があったためだといわれているが，むしろ社倉のような具体的な経営や運営を通して，組織化と企業的利潤や有効な資金運用などを島民が体験したことが，より大きく影響しているのだと考えている。

社倉は，明治３年から約30年間，全島民の出資によって運営されてきた。このような組織化は他の島では見られない。西郷が飢饉対策として島役人に教えた社倉は，資金運用や企業的利潤による島民福利事業を進めたことによって，西郷が思い描いていた以上の近代的な経営を根付かせたものと考えることができる。このような考え方を構造図化することによって，「歴史から学んできた」ことが明確に指摘できるのではないだろうか。

今後の個人的な研究としては，民俗伝承の聞書記録を基本として進めながら，他地域の伝承と比較検討しながら，民俗事象がどのように変遷してきたかを構造図に書き写していきたいと思っている。

歴史研究においては，新たな史料発掘ができるかどうかが大きな課題であり，あまり期待できないのが現状である。現代史としては，奄振が各島ごとに，あるいは市町村ごとにどのように投資され，現在に生かされているかを検証する必要性を感じているが，筆者の力量の及ぶところではないので，経済専門家の研究に待ちたいと思う。

４　今後の研究の方向性

今後の調査研究においては，現代的課題に迫る分析を行なって島民の行動様式を解明し，提言や示唆を与える研究が待たれるところである。このような観点から，神田嘉延「離島・へき地の環境問題と自立的発展」は貴重な研究報告書である。神田が個々の農家から聞書きした経営の現状は，まさに後世に残すに値する記録であり，現代的課題の分析である。このような研究が地元民に還元されることによって，多くの示唆を受けながら問題を解決し，「沖永良部農業」がさらに発展していくものと考えられる。

「温故知新」と先祖の越し方の研究を主眼とした歴史民俗研究と，現代の動態的把握をめざす文化人類学と，さらに現代的課題に迫る経済社会学等の研究に，自然環境学が加わって，住民が参加する島嶼学が確立することを思い描いて，この拙文を終えたいと思う。

（注１）『道之島代官記集成』（福岡大学研究所）には『沖永良部島代官系図』を底本にして与論島にある『代官記事録』で校訂を加えた「沖永良部島代官記」が収録されている。

（注２）島伊名重「維新前における沖永良部島シニグ祭の内容」

（注３）高橋孝代「沖永良部島研究の回顧と展望」（『南島研究』44号）・曳田和彦他「沖永良部島の民俗文化に関する文献資料一覧」（『シマ』第２号）

（注４）甲東哲「薩藩の大島と沖永良部に対する糖業政策の差異」（『奄美郷土研究会報』第２号）・清村杜夫「沖永良部島における嘉永６年の島政改革」（『奄美郷土研究会報』第19号）・先田光演「薩摩藩の沖永良部支配」（『奄美郷土研究会報』第23号）